


いくさ
～人生は誰しも戦、勝ち旗は自分で掲げる～

東秩父村から後世へ受け継ぐべき偉人の歴史をご紹介します。今を生きる人へ、自分たちの今の暮らしを作ってくれた「善き戦を戦われた」方たちを知ってください。

東秩父を戦場とした偉人たちへ、その栄光をたたえて。

偉人たちのいくさ



—高田群次郎氏—

前回・前々回と高田群次郎氏の生い立ちから行った政策までご紹介してきました。今回は政治の道とは少し外れて、群次郎氏が生涯をかけて学んできた「宗教」について触れていきます。

群次郎氏が信じたモノは何だったのか、それを知ることによってまた違った人間像が見えてくるのではないのでしょうか。

第3章 高田群次郎氏と宗教

高田群次郎氏が宗教学を学びだしたのは、本人の言葉で35歳の時と語っています。ひとえに魂の平安を求めていた「真理探究者」であつたからだと言継がれています。様々な宗教を学び、人を愛することに目覚めた群次郎氏は、初めに出会った儒教がきっかけで36歳という若さで村長となる決意をされました。

○儒教

群次郎氏は、心の在り方を求め、儒教（特に陽明学）を学ばれました。儒教は思想哲学的な考えが多いと言われています。その中で、陽明学は「人に生まれながらに備わっている直感的道徳である良知（認識と実践）を実現すること」を説いたものとのことです。陽明学者の熊沢蕃山について群次郎氏は熱心に学び、「その精神に則った村政を布く決意をした」と語っています。

○仏教

仏教についても並々ならぬ関心を持ち、日本仏教史上で現れた祖師の法然・親鸞・日蓮・道元等について研究を進めていました。特

に道元禪師の説いた「曹洞宗」に対して、一方ならぬ尊敬を払っていたそうです。人の心には「仏の心」が備わっており、自分の命を大切にすることでなくほかの人々や物の命をも大切に「思いやり」が息づいている、と道元禪師は説いており、また、「坐禅」を行う宗派としても知られています。群次郎氏の研究心は大変熱心なもので、そこから得たものを大切にすることによって、村民を愛する村政を行うことができたと語っておられたようです。

○キリスト教

（カトリック）

群次郎氏が儒教を極めた後、到達したのがキリスト教（カトリック）でした。そしてキリスト教こそが生涯、群次郎氏が信じる道となったのです。

キリスト教は「神はすべての父であり、私たちはみな兄弟姉妹であるため、差別や迫害を受けていいものではなく、皆平等に愛される」という考えのようです。

群次郎氏は洗礼を受ける

とともにこのような言葉を残されています。

「神に意識あり、これを善という。神に行為あり、これを真という。神に姿態あり、これを美という。善は人間に宿りて、道となり、徳となる。真は自然に施して、理となり、法となる。美は一切の事物に発して、光となる。神と自然と人間は互いに呼吸し、相観応するところ、真・善・美は合して一体となる。愛すなわちこれなり。愛は神と自然と人間とに通ずる一大精神なり。」

こうして、キリスト教により人の真理の境地に立った群次郎氏は、永眠する前に「心の平安を得ることができて、こんなうれしいことはない」と4度はっきり繰り返し、それが最後の言葉となりました。

宗教は先人たちが考えた人の信じる道です。しかしそういった考えは誰に押し付けられることもなく、いろいろを学び、自分自身が進みたいと思う「道」を自らの心に探してあげることが重要であると人は言います。群次郎氏がキリスト教を我が道としたのは、氏自身の選択であり、ここに記すのは歴史的事実の紹介ですので、あしからず思っていただけなら幸いです。

3回にわたり「高田群次郎氏」の人生・政治をご紹介しました。ロマンを求め、自分の信念を通し政治を行った明治の英雄は、皆さんにどのような姿で映りましたか？村にいた偉大なる先人を知り、そしてその方たちの築き上げた村に立つ喜びをかみしめていただけたらと思います。



▶人を愛し、すべての愛を知ったうえで、心の平安を得ることができたのだと語った